

何が文明間・宗教間の共存を妨げてきたのか？

——「キリスト教世界」の創造と終末——

同志社大学 小原克博

1. はじめに

1) 方法論について

①「共存」の阻害要因が存在すると考えるのではなく、むしろ、どのような状況において、ある要素が阻害要因として機能するかを考える。本質主義的には考えない。

(例) 一神教はただ一人の神を信じるから排他的である？

会衆派（組合派）教会は民主的である？

②キリスト教の「共存」の対象を一神教間だけに限定しない。また、キリスト教が非西洋世界において、どのように見られてきたのかを視野に入れることにより、西洋キリスト教の特質（問題点）を描写する。

2) 問題の所在

①「キリスト教世界」という観念が創造され終末（終焉）を迎える中で起こった変化
——現代の諸問題の直接の前提となっている 19 世紀以降の変化を中心にして

②「キリスト教世界」における創造と終末をめぐる言説

2. ケーススタディ

1) 西洋とキリスト教

①ヨーゼフ・ラッツィンガー

——『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』（*Dialektik der Säkularisierung: Über Vernunft und Religion*, 2004）を中心に

ユルゲン・ハーバーマスとの討論（2004 年）。翌年、ローマ教皇に。この文章（「世界を統べているもの——自由な国家における政治以前の道徳的基盤」）の中に、後に起こる数々の問題——「共存」を妨げているもの——の源泉が暗示されている。

2005 年 7 月、教皇によるハリー・ポッター・シリーズへの強い懸念を表す書簡が公開された。欧米のメディアで報道され、話題になった。

2006 年 9 月、レーゲンスブルク大学（ドイツ）での講義内容がムスリムからの批判を受ける。「ムハンマドが新たにもたらしたものは、邪悪で冷酷なものだけだ」（14 世紀のビザンチン皇帝を引用）。講義のテーマは信仰と理性の関係についてであった。

2007 年 5 月、ブラジルでの発言が現地の人々からの批判にさらされる。「福音を説くことでコロンブス到達前の文化の自主性を奪ったことはなく、外国文化の押しつけでもなかった」「先住民は聖職者の到来を歓迎した」と語ったことに対し、「虐殺や奴隷労働の歴史を無視した」と批判を受けた。

2007 年 7 月 7 日、「1970 年の改革以前のローマ・ミサ典書の使用についての自発教令」を発表。ラテン語ミサの復活。

2007 年 7 月 10 日、声明「教会についての教義をめぐる質問への回答」を発表。カトリック以外の教派は「適切な意味では教会でない」とし、WCC、ルーテル世界連盟、世界改革教会連盟などから批判・懸念の声が寄せられた。

「世界を統べているもの」において語られているポイント

- ・科学の暴走（原爆、生命科学）
- ・法の必要性
- ・人権（西洋の発明）、イスラームは西洋と異なる考え方を持っている。
- ・テロ（宗教による正当化）
- ・近代ヨーロッパに生じた二重の断絶（ヨーロッパ・キリスト教世界の外部世界との接触→諸国民の法、キリスト教世界内部の分裂→自然法、人権）
- ・異文化対話（キリスト教信仰と世俗的合理性は普遍性を持っていない）
- ・結論①宗教のパトロジー、理性のパトロジーを抑制するために、宗教と理性は相互関係の中に置かれなければならない。②それをインターカルチャルなコンテキストで具体化しなければならない。

「この相関性のなかで、さまざまな文化が理性と信仰の本質的な相関性を受け入れるようになれば、普遍的な浄化のプロセスが働きはじめ、そのプロセスのなかで最終的には、すべての人間がなんらかの感じで知っている、あるいは感じている本質的な価値や規範が新たな輝きを得て、世界を統べているものがふたたび人類において働く力となりうるのである」（46 頁）。

②トニー・ブレア

——「テロとの戦いの本当の意味は何か」（A Battle for Global Values）を中心に
（要旨）

イスラム過激派は、イスラム国家の近代化など望んではいない。彼らは、中東地域にイスラム過激主義の弓状地域を形成し、イスラム世界の近代化を目指している穏健派による小さな流れをせき止め、イスラム世界が少数の宗教指導者が支配する、半ば封建的な世界へと回帰することを望んでいる。彼らが攻撃に用いる手段に対抗するだけではなく、こうした彼らの思想に挑まない限り、勝利は手にできない。人心を勝ち取り、人々を鼓舞し、われわれの価値が何を意味するかを示すことが戦いの本質である。力の領域においてだけでなく、価値をめぐる闘いで勝利を収めない限り、イスラム過激主義の台頭というグロー

バルな流れを抑え込むことはできない（『フォーリン・アフェアーズ日本語版』2007 年 2 月号、49 頁）。

「イスラム過激派の戦略が明らかになったのは 1990 年代後半。「イスラム世界のなかで抗争を続ければ、礼節を知り、公平さを重んじる穏健派イスラム教徒は過激派の思想を拒絶する危険があるし、その場合、イスラム教をめぐるイスラム教徒間の内戦になってしまう」。こう状況を読んだイスラム過激派は、イスラムの内戦とは全く異なる対立構図をつくりだす必要があると判断した。それが「イスラム対西洋の戦い」だった」（53-53 頁）。

※実際には「イスラム対西洋」の図式は 19 世紀のヨーロッパにおいて形成された（後述）。

「われわれの価値観は西洋的なものではないし、ましてやアメリカ的、アングロサクソンのものでもない。それは人類社会が共有する普遍的な価値であり、地球市民が権利として持つべき普遍的価値である。この点を広くアピールする必要がある」（61 頁）。

2) 非西洋とキリスト教：日本の場合

①島地黙雷（1838-1911、浄土真宗本願寺派）

「三条教則批判建白書」の提出（1872 年、明治 5 年）

「欧州開化ノ原ハ教ニ依ラスシテ学ニヨリ、耶蘇ニ原カスシテ希臘・羅馬ニ基クハ、三歳児童モ知ル所ナリ。之ヲ教法ノ功ニ付セントスルハ、「ミシヨナル」家ノ私意ニ出ツ」（『島地黙雷全集』一、本願寺出版協会、1973 年、25 頁）。

→文明とキリスト教の区別。キリスト教なしに日本の「文明化」は可能であるという主張。

②井上哲次郎（1855-1944）

「上来論述せるが如く、耶蘇教の東洋の教に異なる要素は四種なり、第一、国家を主とせず、第二、忠孝を重んぜず、第三、重きを出世間に置いて世間を軽んず、第四、其博愛は墨子の兼愛の如く、無差別の愛なり、」（井上哲次郎『教育と宗教の衝突』敬業社、1893 年、125 頁）

→「日本的なもの」とキリスト教の区別。両者は「共存」し得ないという主張。

3. 「キリスト教世界」の形成と終焉

1) 「キリスト教世界」(Corpus Christianum) の形成

①初期教会論から「キリスト教世界」へ

キリストの体 (σῶμα Χριστοῦ)

ローマ帝国の公認宗教となる。superstitio から religio へ。

教会が法制度的な統治機能を持つようになり、「キリスト教世界」が形成されていく。

②19 世紀、ヨーロッパにおける世界認識の変化

ヨーロッパの自己理解は、そのイスラーム理解と表裏一体の関係にあった。

「ヨーロッパ」と「アジア」「オリエント」(18 世紀まで)

→「ヨーロッパ」と「イスラーム」「イスラーム世界」(le monde musulman)

Cf. イスラーム主義者(たとえば、サイイド・クトゥブ)による「イスラーム世界」の強調
(羽田 正『イスラーム世界の創造』東京大学出版会、2005 年、196 頁)。

③「キリスト教文明」

「ヨーロッパが「文明化の使命」を唱えるときに、自明のこととして「文明」とは「キリスト教文明」を指していた。その大きな流れにひと言だけふれておこならば、「狂信」と「独裁」と「野蛮」の温床であるイスラームという定式は、十九世紀初頭、ナポレオンのエジプト遠征あたりから、徐々に流通しはじめたものである。そのイスラームとの対比のなかで「キリスト教文明」は顕揚され、新しい人種イデオロギーと協同し、抵抗なく植民地主義的な言説に合体していった」(工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説』東京大学出版会、2003 年、129 頁)。

④「世界宗教」(Weltreligion)

19 世紀初め頃の世界の人々の分類方法：キリスト教徒、ユダヤ教徒、マホメット教徒、無数の偶像崇拜者。

ただ一つの「世界宗教」としてのキリスト教

→仏教を第二の「世界宗教」として認める(仏教はアーリア系の宗教と考えられた)。複数の「世界宗教」へ。

同時代に、キリスト教をヘレニズム化あるいはアーリア化(脱セム化)し、イスラームをセム化しようとする傾向が強まっていった。

「[理性とは] 対照的に、一神教は——それはますますセム的な傾向として描かれるようになっていくのだが——普遍性(多数からなる全体を秩序立てて包含すること)ではなく、むしろ排他性(多数性の拒絶)を象徴するようになっていった。アブラハムの宗教というかつての一神教同盟は、こうした新しい思想の圧力に負けて崩れはじめた。そして、この古い構造の瓦礫のなかから突然に立ち上がったのが、キリスト教ヨーロッパ——あるいは、キリスト教の有無にかかわらずヨーロッパ近代——という新しい概念である。そして、この混乱のなかで、世界の残りの部分はまだ一度シャッフルされ配置しなおされ、やがて新しい地図のなかに描き込まれたのである」(増澤知子「比較とヘゲモニー——「世界宗教」という類型」、磯前順一、タラル・アサド編『宗教を語りなおす——近代のカテゴリーの再考』みすず書房、2006 年、146 頁)。

2)「キリスト教世界」の終焉

①世俗化(secularization)

もともとこの言葉は、宗教改革の時代に、教会の財産(土地や建物など)を行政に譲渡

することを指して用いられ始めた。そこから、土地などが教会の支配から解放されるのと同様に、社会や文化が教会権力から解放され、キリスト教の影響が次第に減退していく現象を広く世俗化と呼ぶようになった。

しかし、1970 年代半ば以降、世界的な「宗教復興現象」が起こることによって、世俗化論は根本的な見直しを迫られることになった。

世俗化を宗教の衰退ではなく、宗教の内面化・個人化として理解し直そうとした（宗教の「私事化」）。しかし、この考え方は、西洋型の政教分離（公的領域と私的領域の区分）を前提としないイスラーム社会においては成り立たない。

②世俗主義（secularism）

19 世紀から 20 世紀前半までは、世俗主義は政教分離とほぼ同義に用いられてきた。今日、ムスリムが多数を占める国では、世俗主義は「脱イスラーム化」として理解される。

4. 「キリスト教世界」における創造と終末をめぐる言説

1) 創造の秩序（Schöpfungsordnung）

①西洋の場合

結婚・家族・民族・国家などの既存の社会的関係は神によって定められており、キリスト者であるかどうかを問わず、すべての人間に当てはまると考えられた。自然の秩序に基づいて既存の社会システムを肯定する姿勢は、すでにアリストテレスにおいて見られる。

「創造の秩序」は、ナチス・ドイツの反ユダヤ主義や南アフリカ共和国のアパルトヘイト政策に大きな政治的影響を及ぼした。

秩序を強調するこのような考え方においては、既存の秩序を逸脱することは不自然で罪なことと考えられた。つまり、服従が秩序に関係するための唯一の正しい道とされた。

②日本の場合

戦時下の日本人クリスチャンにとって国体イデオロギー（大東亜共栄圏構想）が「創造の秩序」の役割を果たした。それは、キリスト教信仰と愛国心の「共存」を可能にしたが、アジア諸国の人々との「共存」を長く妨げる結果になった。

2) 終末論

①西洋の場合

a. 宗教的な側面

黙示的終末論、千年王国運動：教会によってしばしば抑圧・統制されてきたが、キリスト教史の底流にマグマのように流れ続けている。今日の米国・宗教右派勢力にも影響を与えている。

【参考】 ジョナサン・カーシュ 『聖なる妄想の歴史——世界一危険な書物の謎を解く』 柏

書房、2007 年。

b. 社会的な側面

進歩史観を生み出した。Cf. 仏教やイスラームの退歩史観

進化論は、世俗化した終末論として理解することができる。神なしに人間や社会の来歴や運命を語るができる。しかし、それが元になって進歩史的文明観や優生学的な人種・民族差別が生じた。

②日本の場合

内村鑑三（1861-1930）の再臨運動：「非戦論」を徹底していく役割を果たした。晩年には進化論も否定する。

内村は日清戦争のときには、それを「義戦」と見なす主戦論者であった。また、キリスト教は明治政府の近代化政策を補完する役割を果たすことができると考えていた。しかし、戦争に勝った結果、日本の植民地主義政策の中に内村が見たのは、利権を拡大しようとする帝国主義的拡張政策であった。つまり、義戦ではなく単なる侵略戦争に過ぎなかった実態を知ることによって、彼の戦争に対する理解は転換し、新約聖書の思想やキューカーの思想の影響を受けて、次第に非戦論者としての立場を明確にしていく。

5. まとめ

1) 近代において「キリスト教世界」という語に代表される西洋の世界認識が形成され、変化していく中で、その内部（たとえば、ユダヤ人）および外部（たとえば、ムスリム）世界との「共存」可能性が著しく損なわれていった。

2) しかし、今なお、西洋（キリスト教）の価値規範（たとえば、信仰と理性、世俗主義）が他に決定的に優位するものとして、宗教・政治の指導者たちによって語られ続けているという現実がある。その問題性は非西洋の視点から、よく見える場合がある。

3) 創造や終末をめぐる言説は、暴力的・抑圧的に用いられた歴史的経緯もあるが、公平性や希望の言葉として機能させることもできる。そのようなポテンシャルティを顕在化・現象化させる条件についての考察が求められる。

【参考文献】（主要なもののみ。文中で記した文献は除く）

Tomoko Masuzawa, *The Invention of World Religions: Or, How European Universalism Was Preserved in the Language of Pluralism*, The University of Chicago Press, 2005.
Oskar Köhler, “Corpus Christianum,” *Theologische Realenzyklopädie*, Bd.VII, S.206-216.

芦名定道・小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社、2001 年。

山口輝臣『明治国家と宗教』東京大学出版会、1999 年。

『千年王国』とアメリカの使命

森 孝一（一神教学際研究センター長）

1. はじめに

●アメリカとイスラーム世界の対立の原因となり、共存を妨げているもの

1) アメリカの傲慢さ

その原因となっている、ネオコン的な「力」による普遍的(アメリカ的)「理念」の強制。

2) パレスチナ・イスラエル問題における、アメリカの一方的なイスラエル支持

↓

どちらも、アメリカのキリスト教、あるいは「見えざる国教」(civil religion)が深く関係している。

この発表では、「千年王国」思想とそれに関連した「アメリカの使命」という視点から、アメリカにとっての「共存を妨げるもの」について考えてみた。

2. アメリカ外交と普遍的理念

●ベトナム戦争敗戦 20年後の1995年、当時の国防長官ロバート・マクナマラは『マクナマラ回顧録』を出版した。彼はこのなかで、「アメリカが大失敗を犯した主要な理由」として11点をあげている。そのなかには、今日、アメリカが耳を傾けるべき項目が含まれている。

(4) 地域に住む人たちの歴史、文化、政治、さらには指導者たちの人柄や習慣についてのわれわれの深刻な無知。

(5) 通常のタイプとちがう、きわめて強い動機を持った人民の運動と対決したさい、アメリカの持つ近代的でハイテクを駆使した装備、兵力、それに軍事思想の限界を・・・認識していませんでした。われわれはまた、自分たちとはまったく異なる文化を持つ人たちの心からの支持を獲得する任務に、軍事技術を切り替えていくことにも失敗しました。

(8) アメリカの国民も、その指導者たちも、全知の存在ではないことを、われわれは認識していませんでした。・・・すべての国家を、アメリカ自身のイメージとか、われわれの好みにしたがって作り上げて行く天与の権利をわれわれは持っていません。

(4)と(8)は、自由と民主主義という「アメリカの理念」を中東にそして世界に拡大することが、アメリカを安全にするというブッシュ大統領の「理念のグローバルイズム」に対する辛辣な批判である。

しかし、マクナマラは『回顧録』のなかの他の箇所では、上記の反省の言葉とは矛盾する発言を行っている。

ケネディ、ジョンソン両政権で、ベトナムについての決定に参加したわれわれは、この国の原則と伝統と考えるものにしたがって行動しました。これらの価値観に基づいて決定を下したのです・・・

われわれは、価値観や意図についてのみならず、判断と能力によるあやまちを犯したのだ、と私は心から信じています。

このマクナマラの発言はつぎのように要約できるだろう。すなわち、ベトナム戦争の「大義」は間違っていなかった。それはアメリカの「原則」、「伝統」、「価値観」に基づくものであった。「あやまちを犯した」とするならば、それは「判断と能力」、すなわち、「戦略とその実行力」によるあやまちであった、と。

ベトナムからの撤退は、結局は、米軍の戦死者の数が、ベトナム戦争の「大義」と比較したときに、バランスを欠いたものとなったからに他ならない。「大義」は間違っていない。あれほどの戦死者を出してしまった原因は、「大義」を実現するための戦略と実行力に問題があったのだと、マクナマラは考えている。

アメリカは将来、イラクから手を引くだろう。ブッシュは引退後に出版されるであろう『回顧録』のなかで、イラク戦争をどのように回顧するのだろうか。マクナマラと同じように、「イラク戦争の『大義』はまちがってはいなかった。それを実現するための戦略においてあやまちを犯したために、多くの戦死者を出してしまった」と回顧するならば、アメリカは将来、第2、第3のベトナム戦争、イラク戦争を繰り返すに違いない。アメリカに必要なもの、それは「大義」そのものについての反省である。

●マクナマラの回顧録に見られるように、価値観が外交に大きな影響を与えているところにアメリカ外交の特徴が見られる。

○外交を決定する3要素（五百旗部 真）

- ①力の均衡
- ②経済的国益
- ③普遍的理念

↓

○なぜ他国以上に、アメリカでは普遍的理念が外交を決定する大きな要素になるのか。アメリカの場合、外交だけではない。内政においても。「文化戦争」＝価値観による対立。

中絶や同性婚が大統領選挙の争点になる。

↓

人間は「意味を求める」という本性を持った存在であるから。
アメリカの存在の意味とは何か？（＝建国の理念）[後述]

↓

民族や文化を国家の共通基盤に置くことのできないアメリカは、建国の意味（国家の存在の意味）を理念のうえに置かざるをえない。

●アメリカ外交とアメリカの海外伝道の類似性

(小檜山ルイ「海外伝道と世界のアメリカ化」、森 孝一(編著)『アメリカと宗教』、日本国際問題研究所、1997年)、123頁。)

モンロー主義を放棄し、積極外交へと転換した(米西戦争:1898年)アメリカは、外交において海外伝道のレトリックを用いた。

↑

ヨーロッパと自分たちを区別するために(アメリカ例外論)。

反植民地主義=領土的野心はない←アメリカは十分な国土を持っていた。必要であったものは、海外市場(本心)。

「帝国主義的反植民地主義」(Imperial Anti-colonialism)は19世紀末のアメリカにおいて、疑問の余地のない真理であった。(拙書序章「文明の帝国主義」、『宗教からよむ「アメリカ」』、講談社選書メチエ、1996年、16-18頁。)

↓

○フィリピンへの出兵とマッキンリー大統領(1898年)

私は毎晩、夜中までホワイト・ハウスのなかを歩き回っていた。・・・私はいく晩も全能の神に光と導きを祈った。そして、ある晩おそく、次のように神の光と導きが示された。それがどのようにして示されたかは私には分からない。しかし、確かに示されたのだった。その内容は(1)・・・(4)残されている道は、フィリピン人を教育し、高め、文明化し、キリスト教化するために、アメリカがフィリピンを統治することである。・・・こうして、私はベッドに入り、眠りについた。そして、ぐっすりと眠ることができた。

↓

文明化=アメリカ化(内容は、共和制原理[自由と民主主義]、キリスト教)

今日のグローバル化

◆海外伝道における「影響の反射」(reflex influence)

海外伝道での成功を見ることによって、自らの信仰の正しさを確認し、信仰心が高まる。

↓

外交においても、普遍的理念の正しさを確認する。

ベトナム戦争での敗戦がアメリカに与えたショック。イラク戦争も同様。

●イラク戦争の大義とその宗教的表現

アメリカ国民は、自由がすべての人びとの権利であり、すべての国家の未来であることを知っている。自由はアメリカが世界に対して与えるものではなく、神が人類に対して与えるものである。(2003年1月18日のブッシュ大統領の「一般教書演説」)

アメリカへの攻撃は、アメリカを国家として成立させている理想に対する攻撃であった。その理想とは「自由と平等」であり、それが存在しているかどうか、いま戦っている敵とアメリカとの最大の相違である。この自由と平等を私たちに与えたのは創造主である。・・・私たちは、いまこの時、神が私たちを一つにしてくださる

ことを知っている。今夜、ここで祈り求めることは、神が私たちに目を注ぎ続けてくださることだ。私たちの国家は強力である。しかし、私たちの大義は国家よりも偉大である (Our cause is even larger than our country)。その大義とは、人間の尊厳であり自由である。このアメリカの理想はすべての人類の希望である。これらを得ようとする希望が、何百万人もの人びとをこの港に引き寄せた。希望の光は、今なお、私たちの道を照らしている。光は闇のなかで輝いている。そして、闇は光に勝つことはない。神よ、アメリカを祝福したまえ。(「9. 11」1周年のブッシュ大統領の演説)

↑

○「独立宣言」(1776年)

われわれは、次のような真理をごく当たり前のことだと考えている。つまり、すべての人間は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利を与えられており、その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれている。

↓

独立革命からイラク戦争までの、アメリカの一貫した戦争の大義(=啓蒙主義の理念・基本的人権)を世界において実現することの源流は、アメリカ革命である。

↓

フランスの建国の大義も啓蒙主義・基本的人権。しかし、フランスには世界に対する「使命感」はない。

使命感はアメリカ独自のもの？

↓

アメリカの独善と傲慢(共存を妨げているもの)である、世界に対するアメリカの使命感の源流は何か？

3. ピューリタニズム

●イギリスの宗教改革。

「上から」の宗教改革=英国国教会の成立

「下から」の宗教改革=ピューリタニズム

●ピューリタン、ピューリタニズム←pure, purify

会衆派教会、長老派教会、バプテスト教会

メアリー1世のピューリタン迫害→大陸へ、とくにカルバンのジュネーブ

カルバンの予定説→ピューリタンは予定説に耐えられなかった。→Visible Saints

「印」を求める→下記の①と②

●ピューリタンの信仰の特徴

①救われたという宗教体験(回心体験)

②無制限の恩恵に対する応答としての善行

個人レベル

社会（国家）レベル

ピューリタン革命とニュー・イングランドの聖書的政治体制（神権政治・Holy Commonwealth）

③千年王国 終末意識（終わりの時を生きている）

②とともに、17世紀の英米のピューリタンをピューリタン革命とニュー・イングランドの聖書的政治体制（Holy Commonwealth）の形成へと向かわせたものが、③千年王国終末意識（終わりの時を生きている）。（岩井 淳『千年王国を夢みた革命—17世紀英米のピューリタン』、講談社選書メチエ、1995年。）

●John Winthrop「キリスト教的慈悲のひな形」（1630年）

（R. N. Bellah『破られた契約』未来社、1983、45-47頁）

かくして神と我らの間に大目的があり、この仕事のために我らは神との契約を結んだのである。もし神が我らの祈りに耳をかたむけ、平和裡に我らがのぞむ地に導き給うなら、神はこの契約を認め、我らの任務を認証したもうたのだ。しかし我らが目的として示した契約の箇条を守らず、神の心に背き、我らやその子孫のために大きなことを希い、この世の快樂におぼれ、肉慾に負けた行いをするなら、必ずや神は怒り、そういう誓いを破った人びとに報いを下し、この契約を破った代価を我らに知らしめ給うであろう。

この目的を果すために、我らは仕事に協力して一体となり、互いに兄弟愛で接し合い、他人が必要とするものを与えるために自分の贅沢をいましめ、柔和で優しく、忍耐と寛い心で親しく取引をし、互いに楽しみ、他人のことは我がこととし、共に喜び悲しみ、共に働き苦しむ、一つの体としての共同体を忘れず、平和の絆のうちに心の一致をもたなければならない。そして我らが主の讚美と栄光とされるとき、我らはイスラエルの神が我らのただ中にいますことを知り、人びとは我らの植民事業の成功について語るであろう。主はそれをもって新しい英国（ニューイングランド）となし給わんことを。何故なら我らは丘の上の町（マタイ 5:14「あなたがたは世の光である。山の上の町は、隠れることができない。）となることを考えなければならず、すべての人の目は我らの上に注がれているからである。愛する者よ。きょう、命とさいわい、および死と災いが我らの前に置かれている。すなわち、きょう我らの神、主を愛し、互いに愛し合い、主の道を歩み、その戒めと定めと、おきてと、また我らの主の契約箇条を守ることを命じられた。それに従うならば、我らは生きながらえ、その数は多くなるであろう。しかしもし我らが心をそむけて聞き従わず、誘われて他の神々、自らの快樂や利益を拝み、それらに仕えるならばその良き地から、必ず滅び去らしめられるであろう。

だから、すべからず生命を選ぼうではないか。
我らと子孫が生きながらえるよう、
主のみ声に従い、主に頼みつつ、
主は我らの生命・我等の榮なり。（申命記 30章）

○National Identity、Identity Politic (多数派の) 原型

New Israel、City upon a Hill、New England

↓

●ロードアイランドとマサチューセッツ

ニュー・イングランド植民地の多様性→アメリカ合衆国の多様性。

Roger Williams のマサチューセッツ批判＝近代的な政教分離 (公私の区別) の原型

多様性と統合

●三宅威仁 (訳) 『アメリカ教会の現実と使命：プロテスタント主流派・福音派・カトリック』(新教出版社) (Martin Marty, *The Public Church, Crossroad*, 1981) の「訳者あとがき」

現在、アメリカ合衆国で用いられているすべての硬貨には、E PLURIBUS UNUM というモットーが刻まれている。「多から一 (が生じる)」という意味のこのラテン語は、アメリカが複数の州から成る国家であることを示している。硬貨を裏返すと、IN GOD WE TRUST という文字が見える。この標語は、アメリカ国民が神を信じ、国家を神に委ねるといふ決意を表している。・・・多様性を重んじながら統一を生み出すこと、個々人の信教の自由を守りながら国家全体の存在を神に根拠づけることは、アメリカの建国期からの課題であった。

従って、アメリカにおける政治あるいは宗教に関心を抱く者にとっては、この「多様性と統一」および「個人の信仰と社会の秩序」という問題は、避けて通ることのできない研究課題である。

↓

●アメリカ宗教における「多様性と統一」

①憲法修正第一条 (政教分離・新教の自由) による多様性の承認 [←ロードアイランド]

②「見えざる国教」(civil religion) による統一 [←マサチューセッツ]。

4. 前千年王国思想から、「世俗的千年王国思想」へ

●千年王国とは？

わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降ってくるのを見た。この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである。…彼らはキリストの祭司となって、千年の間キリストと共に統治する。

(「ヨハネの黙示録」20章1節以下)

●前千年王国思想と後千年王国思想

「キリストの再臨」と「千年王国の実現」

前千年王国思想:キリストが再臨し、この世を審いたのちに、千年王国を実現する。

後千年王国思想:教会(神の民)の努力によって千年王国が実現し、その後、キリストが再臨する。

●ピューリタン革命、ニュー・イングランドの聖書的政治体制(Holy Commonwealth)をめざしたピューリタンたちは、前千年王国主義者。→関心事は、千年王国の実現ではなく、キリストの再臨に備えるために、審きに備えるための、純粋な教会と正しい国家の建設。

↓

●アメリカにおける千年王国思想の変化と Jonathan Edwards。

アメリカ革命直前の1730~1760年、全ニュー・イングランドを巻き込んで起こった「第一次大覚醒」の指導的神学者。

ピューリタンの前千年王国思想→後千年王国思想へ。

第一次大覚醒を千年王国実現の「印」と考えた。それだけでなく、イギリス、ヨーロッパにおける同時代の信仰復興運動に、千年王国到来の「印」を求めた。

エドワーズの関心事は、キリストの再臨よりも、千年王国の到来。彼はアメリカに終末論的な、特別の役割を見いだした。

(増井志津代『植民地時代アメリカの宗教思想:ピューリタニズムと大西洋世界』、上智大学出版、2006年。)

●アメリカ独立革命と千年王国

(斉藤 眞「アメリカ革命と宗教」、森 孝一編著『アメリカと宗教』)

トマス・ペイン『コモン・センス』(1776年)

当時のニュー・イングランド人口250万人であった時代に、30万部売れた。

本来は反キリスト教的であったトマス・ペインが、聖書の枠組み・用語多用して、世襲的君主制を批判し、イギリスからの独立の必要性を民衆に訴えた。

彼は大覚醒の実態を目撃し、民衆における千年王国的信仰の影響力を体験していた。アメリカ革命を千年王国到来の「印」と理解する。

○ケベック法(1774年)

ニュー・イングランドにとっての「ニュー・フランス」

カトリック教会とフランスをダブらせ、ローマ教皇を戴く「反キリスト」との戦いというレトリック。この戦いに勝利することが、千年王国到来の一つの「印」。

1763年、「フランス・インディアン戦争」(French and Indian War)にニュー・イングランドが勝利。

ニュー・イングランドの期待に反して、英国本国は旧ニュー・フランスを英国の直轄の植民地に。さらに、旧ニュー・フランス地域において、従来通り、カトリック教会を法定教会(国教)とすることを英国は承認した。

↓

フランスだけでなく、英国本国が終末における「反キリスト」と認識されるようになって

た。

○斎藤 眞はアメリカ独立革命における千年王国的信仰を「世俗的千年王国論」と呼んで、その影響力の重要性を指摘している。

●千年王国思想における二元論的世界観とアメリカ
終末のシナリオにおける二元論的世界観＝「キリスト陣営」と「反キリスト陣営」
アメリカ独立革命以降の「世俗的千年王国論」においても、この二元論的世界認識の枠組みは継承され、アメリカが「キリスト陣営」の中核とされた。

冷戦期の「反キリスト」としてのソ連。

↓

冷戦後の「反キリスト」としてのイラン。

「反カトリック」と「反シーア派」

●前千年王国主義者であったピューリタンの関心は、キリストの再臨に備えるために、純粋な教会と社会（国家）を形成すること。外に向かったの「使命感」は存在しない。

↓

J・エドワーズの後千年王国思想以降、アメリカに特別の終末論的役割（使命感）が与えられ、関心は世界に向かった。

5. アメリカのキリスト教原理主義者（宗教右派）と千年王国

(Grace Halsell, “Why Christian Zionists Support Israel,” Hassan Haddad and Donald Wagner (ed.), *All in the Name of the Bible: Selected Essays on Israel and American Christian Fundamentalism*, Amana Books, 1986.)

宗教右派は前千年王国主義者。

宗教右派の中絶反対とイラク戦争支持は、どこで結びつくのか？

●アメリカの前千年王国主義者の変化

アメリカのファンダメンタリストは、1948年のイスラエル建国によって劇的に変化した。＝dispensationalismへの傾斜。7つのdispensations。イスラエルが主役となる。ユダヤ人のパレスチナへの帰還と建国。(＝「影響の反射」)

イスラエルの建国までは、アメリカのファンダメンタリストは地球の年齢について、キリスト教の処女降誕など、過去の事柄が論点。

↓

現在と将来が関心事となる。その時に焦点はイスラエル。

ユダヤ人の帰還と建国のつぎは、dispensationalistsによれば、神殿の建設。

岩のドームとアル・アクサ・モスクがある場所に。モスクを破壊し、神殿を建設する。
Temple Mount Foundation

↓

核による第三次大戦

Dispensationalists は核によるアルマゲドンを信じている。彼らは特異な人びとではなく、fine suites で固めた普通の人。

核戦争が始まる直前に、「天に挙げられる」(Raptured) →ベストセラーの *Left Behind*.

主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降ってこられます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で神と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。

(「テサロニケの信徒への手紙 一」 5章15節以下)

1981年、イスラエルがイランの各施設を空爆した後、当時のベギン首相はアメリカのテレビのインタビューを受けた。その直前に、ベギン首相はアメリカのラビや政治家ではなく、Jerry Falwell に電話を入れて支持を要請した。

有力なテレビ説教の大半は、dispensationalists。

● 対イスラエルに関して、今日、アメリカのキリスト教徒は2つのグループに分断されている。

① dispensationalism を信じて、イスラエルを支持する宗教右派。

② 「ホロコーストを忘れたのか」、「あなたは反ユダヤ主義者 (anti-Semites) か」と批判されることを恐れて、dispensationalism を批判することができないキリスト教徒。